

知恵の樹

No. 261 2021.12.21

町田の図書館活動をすすめる会

<https://machida-library.jimdo.com>

代表：手嶋 孝典

tejitaka@f8.dion.ne.jp

教育と文化を第一に考える市政に向けて

「新しい町田」を作るチャンス到来

藺田 碩哉(まちだ未来の会代表)

◎国民が選挙に行かない似非民主国家

先の衆議院選挙の結果は大方の予想に反し、過半数割れもあり得ると言われた与党が健闘し、野党共闘は一部で成果を上げたものの、立憲民主党も共産党も議席減という結果に終わった。モリカケ桜に始まり、アベノマスク以来のコロナ対策の迷走と不手際で退陣に追い込まれた安倍一菅政権の責任は結局うやむやのまま、自公政治はまだまだ続きそうな気配である。

それにしても気になるのは 56%という投票率の低さである。国の行方を決める選挙に国民の半分ちょっとしか関心を示さない—これでホントに民主主義を標榜できる国なのか。過去を尋ねてみると投票率が最も高かったのは昭和33年(1958年)選挙の76.99%、高度成長に入ろうというあの頃は、人々の政治への関心・期待は大きかったのだ。その後、昭和期は増減はあっても投票率7割をほぼ維持していた。落ち込みは平成から始まり、特に平成後半の安倍長期政権期に急落し、2014年の総選挙は52.66%と過去最低を記録していた。争点の定まらない前回選挙が約54%だったので、今回はこれが大幅に伸びて無党派層の票が掘り起こされ、政界に激震が走る…はずが、何と微震さえ起きなかった。政治への無関心とは、とりもなおさず政治への不信だから、投票率の低さは現政権への不支持を消極的に表しているとみられる。でも、それならどうしてもう一步前進して投票に行ってくれないのか、もどかしい思いを禁じ得ない。

国政選挙さえ、OECD 国屈指の低投票率なのだから、地方選挙は推して知るべし。わが町田市の前回の

市長選の投票率は42.34%、35万人の有権者のうち15万人しか選挙に参加せず、4選を果たした現市長はその内の8万票しか票を集めていない。43万人市民全体から見れば5人に1人しか、投票用紙に市長の名前を書いた人はいないのだ。この点からしても選ばれた者は、自分を選んでくれなかった多くの市民の声にも謙虚に耳を傾けて市政の運営に当たるのが当然だろう。安倍政権もそうだったが、選挙に勝てば官軍で、何でもしたいようにやらせてもらいますというのは、民主主義のはき違えもいいたところだ。そして歳月は巡り、また市長選・市議選の季節がやってきた。

◎真の争点を見つけ出して「争点化」する

選挙が有権者の関心を集めるには「争点」が明確であることが求められる。それも人々の生活に直結するような課題で選択肢がはっきりしていれば、おのずから選挙に参加する人が増えるだろう。国政ならば「戦争をできる国にするのか、戦争放棄の憲法を守るのか」という対立軸を明確にして選挙をすれば投票率が上がることは間違いない。しかし、選挙設定の決定権を持つ政権党は、なるべく争点をぼかして、何が問題であるかを見えにくくするという作戦を取りがちで、安倍政権は特にその点が巧みだった。争点があいまいだと、選挙に行っても行かなくても大して変わらない—行くのは面倒という気分が広がって熱烈支持者しか投票所に赴かない。それこそ政権党の思うツボだった。

地域の選挙でも同じことが言える。どこの首長選挙を見ても、再選三選…をねらう現首長は「歴史と文化のまちづくり」だの「思いやりのある市政を」みたいな、耳に

は抵抗なく入って来るが、およそ無内容で具体性のない「公約」を掲げて選挙に打って出る。その町で深刻な問題になっている課題—例えばごみ処理場の建設の可否とか、赤字の市民病院をどうするかというような問題を「争点化」しないように努めるのが常道だ。対する野党側の候補は、市民生活に関わる深刻な問題をことさらに前に出して、現政権の誤りや不備を突くのだが、相手が乗ってこないで空回りして、一般市民の眼には批判のための批判、単なるいちゃもんを取られがちだ。そうでなくても地域の諸問題には関心の薄い**定時制市民**—昼間は都心に働きに出かけ、夜遅くにしか帰ってこない若者や壮年層、町田のような衛星都市には特に多い—は、たまの日曜日はゆっくり寝ているか、家族とレクリエーションに出かけたい、選挙は勘弁してちょうだいという次第となる。

リタイアして一日中地元で暮らす高齢者、専業主婦、地元で働いている人たちから成る**全日制市民**には、そこで1つの重要な役割が課せられることになる。全日組だからこそ肌で感じ取れる町のさまざまな問題、それを明確に「争点化」して定時組のみんなに示すことである。いまこの町は教育や福祉についてたいへん深刻な状況にあるんです、市の予算の使い方はこんなにおかしいのです、役所のやることはかくも理不尽なんです、これをよりよく変えるためには、こういう方向を目指すべきです、それを担える市長と市議会議員の候補はこういう人です…。コロナが突きつけてきた巨大なインパクトに対処するには、地域の生活と政治の発想転換をいまこそ成し遂げなければなりません…。さまざまな機会をとらえて「町の現実」を多くの市民と共有すること—選挙の季節における市民側の課題はそこにある。

◎図書館運動をさまざまな市民運動に繋げよう

実のところ町田の図書館行政について「争点」はまことにはっきりしている。市の方針は、せつかく時間をかけて8館まで増やしてきた図書館を回れ右して削減することである。それに加えて市の直営を放棄して民間に投げる、削減+民営化の身も蓋もない計画を書き上げた。隣の多摩市では新中央図書館を建設中、八王子市でも地区センターの図書室を図書館に格上げするという真逆な施策が進行中なのには目もくれない、安倍政権伝授の新自由主義路線を地で行っている。まずは抵抗の弱そうな鶴川図書館を血祭りにあげて廃止方針を確定し、他方、新たに作った鶴川駅前図書館は早

くも来年4月から指定管理者に丸投げして運営させる。これらがうまく行ったら、他の図書館にも波及させようという魂胆だ。

それに対する心ある市民たちの対案は明確だ。市民の知的インフラである図書館の公営を維持し、市民の参画を促して図書館活動を活性化させ、本に親しむ市民の輪を広げてコロナ後の市民生活の質的充実を目指そう、というのである。図書館を減らすのか、充実させるのか、この選択肢のみを前に出して市民の判定を仰いだらどうなるだろうか。多くの市民は時代に逆行する図書館潰しを支持しないことだろう。

しかし、内容から言えば明確でも、図書館問題が前景化するのには難しい。まことに残念ながら大多数の市民の図書館への思い入れはさほど深くはなく、図書館を日常的に活用している市民は圧倒的に少数派だ。多くの市民は「図書館はあればあったで悪くはないが、財政難なら一つ二つ減らしてもやむを得ないのでは」という程度の認識である。市が「たしかに鶴川図書館は無くしますが『代替施設』は残します」と言うと、それが全く図書館とは似て非なる「図書館もどき」に過ぎなくても、安心して納得してしまう市民が少なくない。

では、どうすればいいか。図書館問題はそれ自体孤立した課題ではなくて、博物館を廃止したり、自由民権資料館を手薄にしたり、国際版画美術館を無残に改築したりする政策と一続きのものであることを確認して、それぞれに関わっている市民グループと手を組むことである。さらに、町田の教育政策全体に視野を広げ、教育委員会のあり方、学校統廃合の問題、マスコミでも話題になった小学生の自殺問題…それらはみんなつながっている多元連立方程式であることを広く市民に訴える必要がある。それらの問題を解決するためには、個々の項目を越えた根っこの問題—教育や文化を大切に市民のためのまちづくりをするのか、街の賑わいばかりを言い立てて、中途半端な観光施設に巨費を投ずるような、投機屋のためのまちづくりをするのかという争点を市民の前に明快に示さなくてはならない。

コロナ禍は、これまでの常識から抜け出した新しい生活様式と、競争万能の経済から脱した新たな社会の組み立て方を示唆してくれた。目指すべき方向を端的に表現すれば「暮らしが変わる、政治を変える」ということになる。2か月後に迫った市長選・市議選がその第一歩であることは言うまでもない。(会員)

こんな本み～つけた！(第32回)

『やとのいえ』

八尾 慶次(著) 偕成社 2020年

紹介: 駒田 和幸



モノレールが走る。舗装された道路にはたくさんの車が往来し、花を咲かせた街路樹が美しい。画面中央に鉄道の駅があり、電車からたくさんの人びとが乗り降りしている。駅の周辺にはコンビニ、ドラッグストア、フィットネスクラブ、オープンエアのカフェ、さらにたくさんのビルが立ち並んでいる。かなり高層のビルもある。遠景には何棟ものアパートが見える。現在の多摩センター駅周辺を描いた絵に描き込まれたものです。

『やとのいえ』という絵本は、多摩センター駅周辺を定点として、自然と共生しつつ営まれてきた人びとの暮らしがどう変化して現在に至ったのかを描いた作品です。ただし、太古の昔からではなく、1868年の明治維新から現代までのおよそ150年の村の変遷をたどっています。その間の変化があまりにも大きかったからです。案内役は、石の中から掘り出されたという十六羅漢像が務めるという設定です。

なぜ羅漢像が案内役かと疑問に思われる方がおられるかもしれません。それは著者の八尾さんが羅漢像に惹かれていたからということのようです。八尾さんは1973年相模原市橋本生まれですが、育ったのは関西だそうで、京都市右京区の奥嵯峨にある愛宕念仏寺をかつて訪れ、そこにある1200体もの石の羅漢に魅せられたといいます。それらの羅漢像は、住職の呼びかけにこたえて全国の参拝者たちが1980年代に彫りあげたものです。八尾さんは人びとの思い・願いが込められたさまざまな表情の像に「祈りの造形」の美しさを発見し、以来、羅漢像を描き続けたそうです。2013年にポーロニャ国際絵本原画展で入選したのも「羅漢さん」でした。

さて、『やとのいえ』には絵が15枚あります。時代で分けると、アジア太平洋戦争敗戦までが5枚、敗戦後から現在までが10枚となっています。

1枚1枚の絵は、細部まで非常に綿密な考証がなされています。それはこの絵本の編集者である藤田隆弘さん(鶴川のご出身だそうです)や多摩市文化振興財団の学芸員である仙仁径さんの協力によることです。

ですから

1枚1枚

の絵は隅々まで目を凝らしてみていると、実にたくさんの発見ができます。藤田さんによる解説もつけられていますので、絵をみながらこれは何だろうと疑問に思ったら解説を読んでみてください。

わたしの場合、1892年1~2月ころを描いた絵に大八車に山と積まれて運ばれていくものがあり、それが何かわかりませんでした。そこで解説を読むと、メカゴと呼ばれる竹かごとありました。よく見ると、農家の縁側で竹かごを編んでいる人が描かれています。竹かごは府中に運ばれ、そこから東京市内の料亭などに売られていくほどの人気で、多摩丘陵の村にとって大きな産業だったといえます。

本書の圧巻は1960年代後半以降の開発がいかにすさまじかったかを描いているところにあります。多摩市域は多摩川右岸の段丘上にローム層が堆積してきた多摩丘陵上に広がっており、豊かな緑の自然環境がありました。それがブルドーザーを駆使した開発資本によってどんどん市街地化されていきました。開発の最中に見つかった遺跡の発掘調査も描かれていますが、多摩地域の考古学調査に生涯を注がれた柵国男さんは、そんな開発を『多摩の消滅』と言い切りました(『緑がなくなるときーひとつの文化財保護運動の記録』1970年)。土地の来歴やそこに根付いていた暮らしを切り捨て、どこにでもある空間に変えてしまった。そんな怒りを感じさせることばです。でも、八尾さんは、「えがおもなみだも、手のひらに、のせて、その手をそっとあわせませう」と羅漢のような境地で、穏やかにみつめるだけです。

高度経済成長期の開発のすさまじさと対比して、それ以前の村の絵からは人びとが仕事に精を出し、何か活力のようなものを感じさせます。ただ、言うまでもなく、明治維新以降の近代の歴史は文字通り激動の時代で、多摩丘陵の村も別天地であったわけではありません。そうした多摩丘陵を翻弄した政治や対外戦争、経済の

激流をどう描くのかは難しかったと思います。例えば、本書をつくる上で、峰岸松三さん(1922年生まれ、故人)という地元の方が書き残された絵などを参考にしたということですが、彼も1940年に傀儡国家＝満洲国建設の一員に参加し、1943年からは兵役についています。「やとのいえ」に暮らす人びとにとっても戦争から逃れることはできなかったのです。

多摩市は高度経済成長期以降の開発によって急速に人口が急増し、1971年に市制が施行されました。まだ若い市だけに自分たちの暮らしている足元の歴史を知っている人は少ないかもしれません。この絵本はそんな人たちにぜひ手にとってもらいたい作品です。

(会員)

* 町田市立図書館は、7冊所蔵しています。

ショートムービー

「“鶴川図書館”存続のために

～中学生、浪江虔の魂を訪ねて～」制作参加記

鶴川図書館の存続を願う鶴川図書館大好き！の会の話し合いから、篠田道秀氏の企画により、ショートムービーが制作されました。鶴川の地域に私立南多摩農村図書館をつくった浪江虔ゆかりの地を地元の中学生がめぐり、図書館問題を自分のこととして考えようとしたドキュメンタリー映画です。

YouTube でぜひご覧ください。 <https://youtu.be/n5tbQDHNKZs>

高橋門樹(こども教室《もんじゅ》主宰)

今回の鶴川地区にある市立・私立図書館および柿の木文庫を見学させていただく機会に、私の塾の中学生が4人参加させていただいたことは、とても意義深いことでした。子どもたちに読み聞かせをしたり、市民各層に良書を貸し出ししたりすることに努めている方たちが地元にいることを知って、子どもたちは本がどれほど人間にとって大切なものであるかを考えるきっかけになるからです。

柿の木文庫を運営してこられた99歳の志村妙子さんから直接お話をうかがったことや、館内の四方が万を超える膨大な書籍で埋め尽くされた私立鶴川図書館(旧南多摩農村図書館)の中に入れていただいたことで、鶴川の歴史を体感できました。

図書館・文庫が郷土の歴史と人の営為を体現した施設でもあることを目の当たりにする活動は、若者の郷土愛を育む恰好の教育機会になることを、私自身、実感することができました。

眞田かをる(金井中学校2年生女子、9月4日参加)

最初、商店街の中にある鶴川図書館を見たとき、正直「こんなところにあったのか?!」と思った。しかし、図書館の中には他の図書館と同じように魅力的な本たちが沢山あって、他の図書館以上に工夫もあった。

素敵だと思ったのは、図書館の至る所に飾ってある司書さんお手製の折り紙だ。図書館内を回っていると、

その他にも今の季節らしい素敵なポスターもあった。

柿の木文庫に行くと、可愛い看板が私たちを出迎えてくれた。一番印象的だったのは、志村さんその人だった。実は、私が小学3年生の時に学校で戦争についてお話してくださったのが、志村さんだったのだ。平和とは何か、戦争とはどんなものなのか、熱心に教えてくださったことを今でも覚えている。そして今回また、図書館の存在意義について色々な考えを語ってくださった。人生で大切なことを志村さんから2回教わる事ができた、柿の木文庫見学だった。

室川紗希(鶴川第2中学校2年生女子、9月4日参加)

私にとってこの活動はとても貴重な体験でした。鶴川図書館と柿の木文庫の見学をするということで声をかけていただいたとはいえ、自らこのように一歩踏み出したのは今回が初めてのような気がします。私自身、本を読むことは好きですが、それ以前に本と触れ合える場所が好きだからかもしれません。

一度は団地の図書館がなくなってしまうと聞いたことがあり驚きましたが、今回、色々な方々のお話を聞いて、改めてどんな図書館が良いかを考える、とても素敵な時間になりました。これからは昔と変わらず、やはり図書館という存在は残り続けるべきだと思います。

私が一番印象に残ったのは柿の木文庫の方々のお話でした。以前、私も母親に連れて来てもらったことがあるのだそうですが、記憶がありませんでした。ですが

入った時に、どこか懐かしい雰囲気を感じました。本と人との交流を大事にする志村さんの気持ちがよく伝わって、図書館に規模は関係ないのだと感じました。初めて聞くお話も沢山あり、特に農村図書館の話はとても興味深いものでした。

佐々木理緒(和光中学校1年生女子、9月4・5日参加)

浪江さんは町田の図書館と地域文庫発展の功労者で、戦時中に治安維持法によって逮捕されても、鶴川村の農業のために図書館の発展に力を尽くした方です。本を読む事によって学び、農業を発展させようと思いました。子ども向けの本も置き、鶴川村の人々に本を親しませようと思いました。そんな方が広く知られていないのは残念だと思います。

幸い、浪江度さんがつくった私立鶴川図書館の展示コーナーが、いま鶴川駅前図書館(ポプリホール)にあるのですが、そこは人があまり通らない通路にあります。トイレの横で目立たないし、ほとんどの人には気づかれません。もっと多くの人が見て、知ってもらえる場所に移してほしいです。

柿の本文庫の志村さんは、「浪江さんは町田市にとって、忘れてはいけない人だと思う」と話してくれました。私も図書館で学ぶ事を広めようとして尽力した浪江さんは、忘れてはいけない人だと思います。

仲道元紀(真光寺中学校2年生男子、9月5日参加)

今回、僕は農村図書館に行きました。そこには少し古い本からとても古い本まで本棚にたくさん詰まっています。建物自体とても古く、引き戸も木製で時代を感じました。しかし、古いはずなのに木が腐っておらず、

この図書館を利用していた人たちが大切にしていたのだと感じました。

そして、そこで浪江度さんの娘さんにお会いしました。その方の話によると、お父さんの浪江さんは何度か刑務所に入れられても、あきらめずに農家の人たちに本を薦める活動を続けていたといいます。自分が良いと思うものを人にそこまで情熱をもって薦められるのはすごい信念だと思いました。

僕は『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告—』(菅谷明子著、岩波新書)という本を読みました。その本には、ニューヨーク公共図書館のことが書いてあります。ニューヨーク公共図書館からは、数々のビジネス、文化、美術が生まれています。例えば、ゼロックスのコピー機もその1つです。また、宿題の手伝い、教師の授業づくりのサポートなどのサービスも行っています。ニューヨークの図書館には、日本の図書館にないものがたくさんあります。ニューヨーク公共図書館では、子どもは宿題を手伝ってもらえるし、大人は仕事のヒントをもらえるなど、市民の塾のような役割を果たしていると思いました。

そして今、僕も何度か利用したことがある鶴川図書館がなくなるかもしれない状況です。僕はそこが魅力ある図書館だと思っていたので、そうなることは避けたいです。まず、市民が本に興味を持って読んでみることから始めて、いずれ「ただ本を借りて読む」だけではない、ニューヨーク公共図書館のようなサービスが充実した図書館になるといいです。

「図書館の機能」とは何か

守谷 信二 (まちだ未来の会)

図書館に行くと、いつもまず新着本のコーナーを見る。図書館では新刊ばかりでなく、必要があれば古い本も購入するから、新しく受け入れた本は「新刊本」ではなく「新着本」というのである。

先日も中央図書館に立ち寄って、いつものように新着の棚を物色していると、『思言敬事』という聞きなれないタイトルの本が眼に入った。岩波書店から今年5月に出た新刊だ。副題に「ある人文書編集者の回想」とある。著者は加藤敬事という方で、帯によれば、あのみすず書房の編集者だった人である。みすずの編集者の

本を岩波が…と思い、面白そうなのですぐに借りることにした。

図書館に行けば必ず数冊の本を借りて帰るが、全部読破して返すことなどほとんどない。多くは斜め読みしている間に返却期限が来てしまう。中には、借りてはみたものの全く歯が立たず、何日か机の上に置いて表紙を眺めただけで返す本もある。この『思言敬事』も途中で読んで一旦返却せざるを得なかったのだが、それでもとても面白かった。

みすず書房がすぐれた人文系学術書の老舗である

ことは知っていたが、わが国が世界に冠たる翻訳書大
国で、戦後その礎を築いた出版社のひとつがみすず
書房であること、またそれを一身に担ったのが、創業者
で編集責任者でもあった小尾俊人(おび・としと)という
人物であることなどは、この本で初めて知った。

小尾氏は、毎週末海外のいくつもの書評紙誌に目を
通すことを日課とし、そうした営為の中からロマン・ロラ
ンやアラン、ハンナ・アーレント、ロラン・バルト、エドワ
ード・サイードといった著者の本が、いち早くわが国で
翻訳・出版されることになったのだという。そういえば、
少し前に話題になったトマ・ピケティの『21世紀の資本』
もみすずだった。著者は小尾氏の薫陶を受けて二代
目の編集長となった人で、本書に収められた回想によ
って、藤田省三や丸山眞男といった碩学の素顔が垣間
見られるのも興味深かった。

因みにネットで検索してみると、図書館には小尾氏
自身の本も何冊か所蔵されていて、リクエストしたらす
ぐに最寄りの図書館で借りることができた。

* * *

これらの本から私が得た知識はいわば「雑学」であり、
私の生活に何ら実利をもたらすものではない。しかし、
面白い本に出合ったとき、自分のそれまでの狭い視界が
いくらか開けたように感じ、その本のことを誰かに話した
くなる。読書の愉しみや効用とは、そういうものでは
ないだろうか。堅苦しい言い方をすれば、それを自己
教育と呼び、生涯学習の起点となる行為と言っても間
違ひではないだろう。

図書館は、生活の中で必要になった具体的な知識
や情報を手に入れられる場所である。しかしそれだけ
ではない。思いも寄らぬ未知の本と出会い、新しい世
界への扉を開いてくれるのも図書館の大きな魅力であ
り、重要な機能である。近代社会は、そうした両方の機
能を人間が生きるうえで必要不可欠なものと認定し、そ
れを制度的に保障する社会装置として公立図書館を生
み出した。敢えて言えば、最近よく耳にする「広場と
しての図書館」とか、「コミュニティの核としての図書館」
といった言説は、資料・情報の提供という図書館本来の
機能を前提にしたうえで語られるべきものだろう。

今回のような地味な本もしっかりと収集しておいて、
しかも無料で貸し出してくれるのは、いまだきの年金生
活者にとっては本当にありがたい。「本は買って読むも
のだ」などと言えるのは、よほどの物持ちか、さもなけれ

ば限られた本しか手にしない人間にちがいない。改めて
図書館という存在が、掛け替えのないものに思われ
たことである。

そう言えば、現役の図書館長だった頃、現石阪市長
からなぜ図書館は無料なのか、有料化を検討しろと何
度か言われたことがあった。図書館法の無料の原則を
説明すると、そんな半世紀以上も前の法律などさっさと
改正すべきだ、と強硬。「ユネスコ公共図書館宣言」
(1994年改訂)などを持ち出して、公立図書館が無料
なのは「世界標準」ですから、などと口ごもりながら申
上げた記憶がある。

* * *

『思言敬事』はたまたま私の好みに合致した本だっ
たが、多くの市民にはそれぞれにまた掛け替えのない本
との出会いがあるはずだ。したがって、図書館には多
種多様な本を購入できる十分な予算が継続的に必要
だし、何より膨大な出版物から市民の役に立ちそうな本
を選び、長い時間を掛けて質の高い蔵書群を構築する
知識と経験を備えた司書がいなければならない。

図書館司書としてそうした力を身につけるには、私
的な時間を使って書店や古書店に足繁く通い、あるいは
近隣の図書館員同士で互いに研鑽を積む機会をも
つことも必要である。児童サービス担当者なら、日々出
版される児童書には必ず目を通さなければならないし、
地域行政資料担当者であれば、地元の様々な市民団
体や行政内部の職員との繋がりも大切にしたい。こうい
うことを日常的に実践するためには、家庭を維持し生
活していける最低限の給料や職場環境が保証されて
いなければならない。そうだとすれば、図書館運営そ
のものを民間企業に委ねる指定管理者制度下での低
賃金労働では、公立図書館としての機能を十分に発揮
することは難しい。

また、近年市民の寄贈本を集めた「まちライブラリー」
というものが全国各地に生まれ、「ミニ図書館」とか「私
設図書館」という言い方で、マスコミなどでもしばしば採
り上げられている。個人や団体が自宅や店舗、寺院、
病院などの一角に本のあるスペースを設置して、そこ
を拠点に本の貸出だけでなく、読書会やワークショップ
なども開催する。本をひとつの媒介として、人と人との
新たな繋がりを生み出すのが目的だという。人々の孤
立化がますます加速する現代社会にあって、それはそ
れで大いに意義のあることだし、同様の取組を行って

いる図書館もある。だが、公立図書館がまず第一義的に担うべきは、市民が必要とする資料・情報の徹底した提供という機能であり、それは「まちライブラリー」に望むべくもないことであろう。にもかかわらず、「まちライブラリー」があたかも公立図書館の代わりになるかのよう
に称揚し、喧伝する向きに対しては、十分に警戒して掛からなければならない。

市は、現在の鶴川図書館を廃止して、「コミュニティ機能を併せ持つ市民協働型図書館」をなどと言い出し

ている。何度でも言うが、本来の図書館機能をしっかりと備えたものでなければ、図書館の名に値しないし、「公」が責任を持って運営する以外に、図書館が図書館として機能することは不可能なのである。

実は図書館機能などはじめから眼中になく、行政経費の削減という真の目的を覆い隠すための方便として、「コミュニティ機能」や「市民協働」といった都合の良い言葉を持ち出しているのだとしたら、行政の恥ずべき知的退廃というものである。(会員)

第 22 回まちだ男女平等フェスティバル メイン企画 (※チラシから抜粋しました)

絵本で見るジェンダー

～時代と立ち位置で、どう違う?～

子どもの頃から触れる機会の多い絵本によって、想像し疑似体験することで、多様な生き方、多様な性、自分と違う「立場・個性・考え」を理解することができるのではないのでしょうか。児童文学作家で、家庭文庫を主宰される草谷桂子さんに、これまで考えてこられたことや実践されてきたこととお聞きし、ジェンダーの視点で描かれた絵本をご紹介します。私たち一人ひとりがのびのびと生きられる社会を目指して今後の活動や生き方、これから生きる子どもの育ちのヒントになるお話を伺います。

講師：草谷 桂子さん

児童文学作家。家庭文庫「トモエ文庫」主宰。日本児童文学者協会会員。静岡市在住。著書・絵本書評集『ジェンダー・フリーで楽しむ「こどもと大人の絵本の時間」』(学陽書房)・近刊『レインボー・ブックガイド 多様な性と生の絵本』(子どもの未来社)・女性啓発誌「WE JEARN」にジェンダーの視点での絵本紹介を2015年に1年間12回連載・『絵本学講座』3「絵本と社会」松本猛編(朝倉書店)に「人権とジェンダーの視点で絵本を見る」の評論と絵本の紹介を掲載



2022年2月5日(土) 9時45分(開場9時30分)～12時00分
町田市民フォーラム 3階ホール (定員94名)

入場無料

講演に先立ち、オープニング企画とセレモニーがあります

申込方法:1月7日(金)正午～1月30日(日)

町田イベントダイアル・町田市ホームページのイベント申込システムイベシスへ

☎042-724-5656(年中無休・7:00～19:00)

保育(1歳6ヶ月～就学前)を希望の方は、1月7日(金)正午～1月23日(日)までに

町田市イベントダイアル☎042-724-5656へお申し込みください

「イベシス」QRコード↓



◎オンライン配信もあります。※新型コロナウイルスの感染状況によっては、会場開催は中止になる場合がございます。ただし、その場合でもオンライン配信は予定どおり実施します。

主催：第22回まちだ男女平等フェスティバル実行委員会

共催：町田市男女平等推進センター 電話 042-723-2908

〒194-0013 町田市原町田 4-9-8 町田市民フォーラム 3階



例会 11/30 (火) 報告

・16:30～印刷・発送作業等:
清水・鈴木・手嶋・丸岡・守谷
・18:00～19:30
中央図書館・小集会室
出席:石井・金澤・清水・鈴木(真)・
手嶋・福田・守谷

議題

1. 会報について

次号(№261):巻頭言(藺田、市長選挙について依頼済み)、「こんな本見〜つけた!」第32回(駒田、『やとのいえ』について)、ショートムービー「鶴川図書館存続のために〜中学生、浪江度の魂を尋ねて」参加記、「図書館の機能について」(守谷)

2. 今年度の活動計画について

講演会について、辻由美さんではどうか⇒打診(守谷)2月か3月に。→4月にシンポジウムを企画中。

3. 「町田市5カ年計画 17-21」、「町田市公共施設等総合管理計画」等について

○鶴川図書館大好き!の会の取り組み:今年度は鶴川図書館が公立図書館として存続できるよう活動する。

10月17日(日)第3回鶴川図書館応援まつり開催。「知恵の樹」№260参照。

11月7日(日)第5回ワークショップ 午後2時～鶴川市民センター 10名参加

○「すすめる会」の取り組み:

①鶴川駅前図書館への指定管理導入スケジュール

第8回定例教育委員会(11月5日)

議案第24号 町田市立図書館条例(案)について⇒12月市議会定例会に議案として上程するため議事非公開(市議会の議決後、議事公開予定)。既に市議会の資料として公開されている。鶴川駅前図書館の開館日や時間の拡大についてだった。

「知恵の樹」№260参照。

②図書館嘱託労との話し合い

12月2日(木)午後6時～町田市民文学館3階第1・2会議室 次第: 1. 開会のあいさつ:手嶋孝典 2. 問題提起:鶴川図書館大好き!の会からの提案(鈴木真佐世) 3. 質疑・討論 4. まとめ(守谷信二) 5. 閉会のあいさつ:杉本佳奈(自治労町田市図書館嘱託員労働組合執行委員長) 司会:手嶋

報告

1. 第19期図書館協議会第2回定例会

「知恵の樹」№260参照。

BMの小型化については、小型化して台数を増やすことが考えられているようだ。しかし、台数を増やすかは疑問である。

2. 団体及び個人からの報告

嘱託労:引き続き要求書(2021年会計年度任用職員賃金等に関する10月12日付要求書)の交渉をしていく。

学校図書館を考える会:3月26日(土)町田市文化交流センターで講演会を予定。当初大人対象に考えていたが、コロナも収まってきたので、子どもに聞いて欲しいという事になり杉山亮さんに交渉中。

石井:「としょかん」(159号2021.11.1発行)の最後の頁、「本を選ぶ」で浦安市立図書館が紹介されている。/金森図書館⇒11月からおはなし会(毎週水曜日)はボランティアにも参加していただき実施中。非接触型のスタンプラリーなど実施。/まちライブラリーで自主講座を4月から実施、7回目。参加者はスタッフ含めて2〜5人。30〜60分のミニ講座。本の紹介やゲーム。換気、話す時間などに気をつけている。

鈴木(真):鶴川図書館大好き!の会は、鶴川図書館の問題をもう少し広いエリアの人にも知ってもらうために、NPO法人町田市レクリエーション連盟の「子どもも大人も遊びもまちだ展」(2022.2.23)に参加する。ヘンゼルとグレーテルの顔はめパネルを12月18,19日に冒険あそび場の子どもたちと作る。/12月4日柿の木文庫として鶴駅のおはなしコーナーでおはなし会をする。取り上げる作品について、文庫メンバーが賞ももらっている紙芝居を本人によって演じることが断られたのは残念だった。図書館が主催のおはなし会では貸し出しに導くために所蔵している本に限るのは理解できるが、柿の木文庫と協働のおはなし会なので作家が自ら演じる紙芝居などは柔軟な対応ができないのだろうか。実物を見ずに、所蔵しているかどうかだけの線引きをするのはいかながなものか。

《編集後記》本誌今号4,5頁掲載、「ショートムービー『鶴川図書館』存続のために〜中学生、浪江度の魂を訪ねて〜』制作参加記」の高橋門樹さんから、小・中・高生が鶴川図書館で借りた本の内容紹介と考察を書く機会を本誌に提供頂けないかとの提案がある。若い世代の参加により、内容の幅も拡大するので大歓迎!(T2)